

鼓膜

私の左耳には鼓膜がありません。いくつの時から無いのかははっきりしません。小学生になる前から、中耳炎で良く近くの内科医に母と一緒に行きました。医者に行くといくどオキシドールで洗ってくれました。オキシドールを耳の中に入れると泡立つ音が気持ちよく聞こえます。医者が、母に、悪性ではないと言っていたことを鮮明に覚えています。医者に行っても過酸化水素水で洗うのみでその他の対応はありませんでした。このため、耳に液が垂れてくると、医者には行かずに、それを綿棒で吸い取り、耳穴にオキシドールを直にいれました。そうすると、いかにも、良くなりそうな音がします。中耳炎は痛いもののようにですが、私には”痛いと感じた記憶が残っていません。このことは、かなり幼少のときから鼓膜は大きく破れていたものと思われます。初期のときは綿棒もよいものはありませんし、これに変わる紙繕りもやわらかい紙が無かったので、新聞紙で紙繕りを作っていました。中学時代は野球部に所属していましたが、中耳炎で外耳に液体が溜まったり、垂れ落ちたり、またそのことを友達から指摘されたこともありました。友達から指摘されるということは、やはり痛みは無かったということだと思います。このまま就職のときも片耳の難聴は問題になりませんでしたし、生活でも特に不自由は感じませんでした。

社会人になって一度だけ、耳鼻科に行ったことがあります。この時の先生は耳の X 線写真を撮ってくれました。そして鼓膜が無いことも正式に判りました。先生は鼓膜代わりになにか薄い膜のようなものを鼓膜のあるべきあたりに押し当てて「聞こえるか」と聞きましたが、私が聞こえませんと言ったら直ちにやめてしまいました。そして、脳膜炎になる恐れがあるから、最も良く効く薬(抗生物質?)を使うよ、と言って私の耳の中に注入しました。私は幼いときに聞いた悪性ではないという言葉信じていたし、悪性のように腫瘍が拡大することもなかったので、脳膜炎という言葉に衝撃を受けて、先生に聞いたところ「そんな簡単に脳膜炎になってたまるか」と言いました。このとき私は、先生が慰めてくれているとしか受け取れず、大変ショックを受けました。

それからしばらく耳垂れもなく高級な薬が効いたのかなとも思いました。しかしながら私の耳垂れは完治しませんでした。そのまま現役生活と定年後の延長業務も無事こなし 65 歳で仕事から離れました。

仕事を離れても、毎年一回人間ドックは欠かしたことはありません。これは現役時代の会社の健康管理方針で 40 歳ぐらいから毎年実施していますので 35 年近く続けていることになります。この人間ドックの聴力検査で左耳の評価は D ですが、幼少期からの問題だと面接時に言うとそれではということで評価 B にしてくれます。評価 B は直ちに処置が必要ではありません。この状態が何年も続きましたが、定年をわずか過ぎたころに、人間ドックの面接の先生が「最近耳鼻科も進歩しているので一度相談してみたら」と言って同じ病院内の耳鼻科を教えてくださいました。この時は未だ残っていた仕事が忙しかったこともあって、また生活にそれ程大きな支障を感じていなかったもので、そのうちそのうちと時間が経過しました。73 歳の暮れになって突然耳の聞こえが悪くなりました。昔買っておいた補

聴器をつけてもよく聞こえません。骨伝導型補聴器を使うと聞こえますが、分解能が悪く周囲の雑音が大きくなります。TV の音量も従来の倍近く上げて聞き取れません。こんなに大きな支障が現れたのは初めてです。

このまま耳が聞こえなくなってしまうのではないかと心配しながら、急いで近くの耳鼻科医院に行きました。その結果は右耳の鼓膜に穴が開いていました。先生は最近できた穴なら自然に塞がりますとって耳用の抗菌薬(?) を調合してくれました。これを2週間続けたところ、右耳の鼓膜は元に戻りました。この時先生はもしその気があるのなら左耳の鼓膜を再生できる病院を紹介すると言いました。聴力は戻るか否かわからないが鼓膜を付けると黴菌が中耳に入らないので耳垂れは防げるということでした。

今回は間を開けずに紹介していただいた病院(水戸協同病院)に行きました。こちらの先生は紹介状を見て鼓膜の再生(正式には鼓室形成術)の話をしてくださいました。耳のCTを撮影して手術の可否を検討した結果手術はできることとなりました。その後の全身麻酔対応検査でも異常はなく、病院の手術日程、自分のテニス行事の日程から入院2月9日手術2月10日と決定しました。

手術入院

2017年2月9日2時前に景子に送ってもらい協同病院へ。外は雪化粧水戸やひたちなかでは数センチの積雪。体重身長を測定した後入院生活の説明。聴力測定の後、麻酔医の麻酔方法の説明リスクの説明を景子と共に聞き同意書にサイン。今回も全身麻酔のリスクは死亡も含まれていて厳しい。全身麻酔というのはかなりのリスクがあるのだと再認識しました。

私は過去に2回全身麻酔の経験があったことと、事前の対全身麻酔検査で何も問題がなかったのでそれ程心配はしませんでした。その後散髪屋さんが来て耳の近くの髪の毛をカットして剃ってくれました。短時間の作業でしたが2500円はその場で現金支払いでした。一瞬高いと思いましたが、ベッド上作業のためのキャップなどもあってそれ程高いものではないと思いました。

当日は歩いて手術室まで行きました。自分の足で手術室に行ったのは初めてです。長女の景子が昨日に続いて付き添いに居てくれました。朝一番(9時半)の手術のため、妻の牧子は脳溢血の後遺症で歩行も完全ではないこともあり、景子一人の付き添いでした。このとき自分が既に子供から支援を受ける年齢になったのだとつくづく思いました。手術前には本人の確認と手術部位の確認が厳密に行われました。この時医療ミスなどのニュースを思い出していました。マスクに気体が流れ始めたとき一瞬咽る感じはありましたが、その後は何も意識がなく気が付いたら病室に戻っていました。事前の麻酔説明では喉に管を通し手術後意識が戻ったことを確認してから管を外すとの説明がありましたが、この件についても全く意識がありませんでした。



左耳上部髪のカット



手術衣に着かえて



手術後

手術は完全にシステム化されており、手術前に説明のあったリスクは全くありませんでした。手術後看護師さんや先生から痛みはありますか、吐き気は、気持ち悪くないか、ふらふらしないか 手足のしびれは無いかなどと手術当日から次の日まで、何回も聞かれました。幸いこれらの現象は全くありませんでした。

病室に戻ってしばらく後に手術衣からパジャマに着かえ、エコノミー症候群対策のストッキングも外して、なにやら説明があったのでうわの空で聞いていました。しばらく休んでいると尿意があったので、用を足して部屋にもどりました。少し後になって看護師さんが、お小水の事を聞いてきたので、先ほど済ませました・・・と言ったら一人で行ってはいけませんと注意されてしまいました。どうやら麻酔が覚めて最初に立つと転ぶこともあるので、付き添いで用を足すルールになっていたようです。私は聞こえが悪いので昔から正しく聞き取れなくても、わかったふりをする悪い癖があり、今回もこれで失敗しました。しかしながら指示する方でも「御小水の時は知らせてください」ではなく「立つと転ぶ恐れがあるので、御小水は必ず一人で行ってはいけませんこちらが立ち会いますので知らせてください」と言ってくればよかったなともおもいます。もともと耳が悪くて入院しているのだから、その程度の対応は欲しかったと思いますが、これは現代では過剰な要求かもしれません。この件があったので、水を飲むときも飲んでいいかと聞いたら、私がみているので、そこで飲んでみてくださいと言われました。ペットボトルの水をゴクリと飲むと、大丈夫ですねと言われました。この件も先ほど言われたとしたら全く聞き取れていなかったこととなり心配になりました。左耳の鼓膜が再生できたらもう少し聞き漏らしが少なくなるのではないかと期待しています。

手術の日もとても困ったことは、長く固定して寝ていたためと思いますが、その夜の就寝中腰がとても痛かったことです。寝返りも左耳部を下にできないこと、点滴の管が付いていることなどから自由にできませんでした。これに加えて隣のベットの患者さんが、夜中に頻繁にナースコールをして、呼吸器系の問題があるらしく、音がすることなどがあって、手術当日の夜は最悪でした。それでもこの状況は過去に経験した状態よりは良い方でした。

手術の翌日は腰痛も嘘のように治っていました。その後は安静度、排泄、食事などの制限はなく術後点滴抗生剤が続きました。点滴は患者の腕に取り付けられたバーコードと点

滴容器につけられたバーコードを読み込むと pc 画面一杯に○印が表示される仕組みになっていました。この方式であれば担当者が点滴液を間違えることは無いと思いました。しかしながら点滴時間についてはすこし不満があります。滴下数の設定幅が大きく変化していたことです。点滴の管が腕についていると、患者の負担は大きくなります。自由は利かずに特に就寝中の点滴は睡眠妨害になります。このため患者はなるべくはやく点滴が終わって自由の身になることを望んでいます。こういう心理状況下で点滴の落ちる速さが素人判断ですが、極端に遅く設定されるとイライラします。点滴速度の設定は看護師さんの基本事項の一つと判断しますが、看護師さんも大勢入れ替わりますので、対応にも差があります。また点滴液が落下し終わった時に直ちに取外して欲しいのですが、これも看護師さんによって、タイムリーに来てくれる方とそうでもない方が居ます。ある夜の事、点滴が終わったので早く腕から外してもらってトイレに行き眠りにつこうとしましたが、1 時間経過しても来ません、仕方なく空の点滴袋と一緒にトイレに行って、仮眠しました。看護師さんもいろいろと忙しいのだろう、相手の立場も理解しなくてはと自分に言い聞かせていました。こんなことを考えていると目が冴えてきて全く眠れません。消灯後 3 時間経過しても現れないため、我慢できずにナースコールをしました。看護師は直ちに点滴管を外してくれました。今までの時間は何だったのかむなしくなりました。どうやら点滴が終わったらナースコールをするのが普通のようにです。それならば最初から「点滴液が落下し終わったらナースコールしてください」と言ってくれば・・・と思います。その後対応してくれた看護師さんの中には点滴開始後そのように声掛けしてくれた方もいました。看護師さんいろいろということでしょうか。

手術後 5 日ごろになるとさすが運動不足と日光浴が欲しくなり、屋上での歩行(1 周 150m)を 10 周程度、売店へは階段(60 段)を使っていくようにしました。



病棟屋上歩行コース(1 周 150m)



屋上から千波湖 筑波山が見える



景子の働いている県庁も見える

持参してきた本も次々と読み終わりました。途中まで読んでいた百田尚樹の永遠の 0 も読み終えて、涙涙・・・でした。

手術後 6 日目の夜についに点滴管が外されて自由の身となりました。さらに翌朝の処置では手術後初めて中耳に詰めてあったガーゼの交換がありました。朝食前に痛み止め薬を飲んだためか、痛みはあまり感じませんでした。中耳のガーゼを取り除いたとき、従来の感じに比べて音が聞こえるような感じはありましたが、医者は聞こえについて何の関心も示さず作業を進めます。処置室に大勢の人(多分研修医)が居て先生が説明していました。中耳が開いたところで数人の研修医(?) が交代で私の耳の中を覗いていました。再び消毒

液のついたガーゼを中耳に詰め込んだ後抜糸も行われました。抜糸後は耳外側の覆いとメッシュ包帯がとれてこの部分もすっきりしました。包帯がとれるとシャワーが可能となり、シャワー室の予約と耳を覆うビニールのキャップが渡されました。

この日は点滴もないので午前中から屋上ウォーキングをしました。だんだんと退院が近づいてくる喜びから気分も軽く、14 周 (2.1km) のウォーキングをしましたが、疲れは感じません。元気な体を授けてくれた両親に感謝したり、ケトン体(糖質制限食事)に感謝したり、退院後直ちにテニスができるように、右腕はプロネーションをしながら腕を振り、同時に手を握る運動をしました。気分は爽快です。

今日は初めてシャワー室を使いました。耳キャップをしての洗髪もうまく行きました。洗髪後テニスの仲間の一人が見舞いに来てくれましたが、病院側はインフルエンザ対策のため、基本的には面会を認めていません。見舞いに来てくれた方には申し訳ないけれど、家族も面会に来させていない状況なので許してほしい。この面会制限は病気を治すという点からいえば大変良いシステムだと思います。相部屋で隣のベッドから大勢の見舞客のはなし声が聞こえるという状況は、他の入院患者の負担になります。



術後 1 日

術後 2 日

術後 7 日

耳キャップ

図は術後 1 週間の包帯の様子を示します。スマホの自撮りを利用しているため顔が長く写っているのが気になります。この日は耳の包帯が取れ体が軽くなったこともあり、屋上の散歩コースを午前 15 周、午後 15 周歩きました。この結果、就寝時に久しぶりの疲労感があり、満足感がありました。今日は水戸地方も春一番で、病室の窓からはすごい風切音が聞こえてきましたが、屋上に出ると、気温は非常に高いので、風はそれ程苦になりませんでした。時々背中を押されるほどで、病室に届いたメールの中には「本日春一番の強風のため那珂工場テニス部 OB 会の例会は中止」というものもありました。

手術後 8 日目の診察で入院前にお世話になった先生から、順調に回復しています。このままいけば月曜日(手術後 10 日)に退院できます。という嬉しい知らせを受けました。退院の目途が付いたので、この日はさらに爽快で、屋上の散歩コースを午前と午後各 10 周まわりました。

今回の鼓膜形成手術は入院時に配布された計画書(日付とアウトカム、日常生活行動、食事、治療、検査、教育指導などの計画)によると、鼓室形成術となっています。中耳と内耳

の間を鼓膜で仕切り内耳室を作るという意味とされます。この作業は耳前上部を開いて、側頭筋という筋肉を被う筋膜を切り取ってこれをフィブリノゲン製剤というヒト血漿由来の凝固タンパク質を用いて鼓膜の位置に接着する方法でした。フィブリノゲンは特定生物由来製品(ヒトの血液)ということで、事前に、感染症などのリスクがゼロでないことと、宗教による制限などについて同意書を提出しています。手術前のCT検査では耳小骨の変形や耳小骨前に膜があって内部に液体が満たされていたので・・・これらの処置も同時に行ったものと思います。これらの処置により耳垂れは完全に止まり、聞こえも改善できると言われていますが・・・結果は今しばらく後になると言われています。

いづれにしても、私の人生で初めて(と感じる)左耳から音が聞こえる感激を得ることが楽しみです。そしてこのことにチャレンジした充実感があります。このチャレンジの背景には今は亡き父母がいずれも高齢で手術や治療に挑み、二人とも、高齢まで元気に生きたことがあります。お父さん、お母さん、ありがとう。

2月20日ついに退院の朝を迎えました。入院12日目手術後10日目です。今回の入院は、来月開催予定の水戸オープンシニア連盟の参加者募集締め切りの期間であったが、それ以外の仕事は無かったので、心の安定していた入院でした。テニス関連の仕事はパソコンの使用が正式に認められたことにより、ほぼ問題なくできました。大会初日の参加者は全国から160名を超え、単独参加者の調整も済ませて、参加者報告を病室から行いました。

入院中心が安定していたのは、手術が鼓室形成という、命に直接かかわる問題ではなかったことによります。全身麻酔というリスクはありましたが、何も問題ありませんでした。その上に、過去の入院に比べたら、人生感もより成熟していたと思います。既に両親もこの世にいないし、定年退職後に多く読んだ本(般若心経、法華経、観音経、無量寿経、などの仏教書、素粒子、一般相対論などの本)の効果がでていていると思います。また、ここ数年続けている糖質制限食と自宅での食事当番の分担などがあって、病院の食事(ご飯140g)はご飯1粒も残すことなく、頂きました。

一つ心配なことは、私のテニス仲間で、日頃大変仲良くしていただいている女性が、胸の腫瘍(乳がんの一種)の治療のため、水戸オープンの参加と、運営協力を辞退してきたことです。私は過去に膀胱がんの入院と手術の経験があります。腫瘍の程度も深刻なものではありませんでしたが、その時の心理は、簡単には表現できないほど、深刻なものでした。手術の時期も今の彼女の歳に近い歳でした。このため、彼女の一時離脱はよく理解できます。

やはり、今回の入院で、自分の人生観が達観したように感じたのは、人間が成長したからというより、鼓室形成という命に直結しない手術であったことが原因ではないかと思います。なかなかブッダの心には到達できないと思うし、これからも、まだまだ、悩みは続くと思い、修行も続けなければならないと思います。

2017年2月22日 ひたちなか市廣瀬博

2017 年 5 月 16 追加

昨日手術後 2 回目の診療のため協同病院に行き聴力テストを行いました。先生の診断は、手術前と変わらないという判断でした。確かに自覚症状は同じでしたので、予想はしていましたが残念でした。先生の意見では手術前に鼻骨の損傷があり、このためではないかと言いました。その後外耳の写真を撮ったところ、鼓膜の 2 か所右上部と左下部に穴が開いていました。協同病院に掛かる前に近くの病院に掛かったときに、右耳の鼓膜に小さな穴が出来て聞こえが悪くなったので、聴力が戻らないのはこの穴のためと思いましたが、先生の名誉に傷つけてはいけないと思い何も言いませんでした。この穴があるため耳垂れが止まらないと言いました。確かに耳垂れは手術直後から続いていましたから、術後から穴があったことも予想されますが、術後は常に順調ですと言われていましたから、すこし矛盾を感じます。耳垂れの種類が違うのでしょうか。鼓膜の穴は自然に塞がりますかと尋ねたところ、わからないとの返事でした。いづれにしても 2 か月後に診断予約を行ったので、それまで様子を見るという判断だと思います。また上記画像の鼓膜の部分が赤くなっていたので、なぜ赤のか尋ねたところ、鼓膜にした筋膜に毛細血管があるので赤くみえるとのことでした。

今回の診断でも薬の調合などは一切ありませんでした。退院後一度も薬や消毒などの処方が無いということは順調に回復していると考えることもできます。とにかく次の診断まで状況を見守っていくことにします。

2017 年 9 月 25 日

今日手術後 4 回目の診療のため水戸協同病院に行きましたが、結論は残念な結果でした。前回から監視をしていた鼓膜は穴がふさがるところかほとんど無くなっていました。先生はこの症状に対する策はないといわれました。紹介してくれた近所の耳鼻科(あさか耳鼻咽喉科クリニック)には紹介状を書くので今後そちらで様子を見るように言われ診療を終わりました。非常に残念な結果となりましたが私には悔いはありません。現代医学の治療を受けたという事実というかトライしたことには満足感があります。人生良いことばかりではないと自分に言い聞かせ、生まれながらに耳の聞こえない人も居ることを思えば私は片耳が聞こえて日常生活には不自由しないことは幸せであると考えなければいけないと思うように努めています。耳垂れは相変わらず続きますが、これは病的現象ではなく、鼓膜があれば、鼻から出るものだそうです。それであればなおさら問題は残りません。今回私の耳のために努力していただいたすべての方に感謝いたします。

2017 年 9 月 25 日 廣瀬 博